

ラクロ試論

西川長夫

序

ラクロ研究はいまだ端緒にあつて、ラクロとその作品に関する、充分に納得のいく解釈がだされているとは思われない。「危険な関係」の獨創性は安易な研究をはばむ性質のものであるし、革命の時代を生きた人間の例としてその行動はなぞにとみ、残された伝記的資料も少なく一人の統一的な人間像を描くのはきわめてむずかしいのである。ラクロは非常に理解しにくい作家である。おそらく作家という言葉もあたらないかもしれない。軍人であり優れた技術者であった。「危険な関係」によつて一躍して著名人の仲間入りする以前にも、当世風のかなりエロチックな詩や失敗せるオペラの台本の作者としていくらか名前も知られていた。文学作品に限らず「ヴォーバン讃」や「女性論」のような論文も書いている。一七八九年のジャコバン派。九三年にはオルレアン派のスパイ容疑で投獄されたこともある。一八〇三年、南イタリアのタラントで病死したときはナ

ポレオン軍の将軍であつた。このような生涯をたどつた人物を理解することはフランス革命の理解に通じる。ラクロは思想的にはルソ一の弟子であるから、ルソ一の思想がどのような形でうけつがれて大革命から十九世紀に至るかを知らなければならない。またラクロの作品を理解することは、十八世紀文学と十九世紀文学のつながりを知るうえでぜひとも必要である。例えばスタンダールを小説史の流れのなかで理解するためにはラクロの果たした役割を知らなければならぬ。こうした事情は充分に研究意欲をそそめるものであらう。

私達は討論を重ねるうちに、「危険な関係」の解釈のかぎは「女性論」との関係の取扱ひ方にあるという結論に達したので、二つの作品の關係に焦点をあてることにした。さらにこの問題に関するジャン・リエック・セイラスとロジェ・ヴァイヤンの対立を検討し、それを越える方向を目指した。セイラスの論文を重視したのは、それが最近に出たほとんど唯一のアカデミックな研究書であり、現在のラクロ解釈の主流をそこに認めたからである。私達はこの書物か

ら多くを学んだが、基本的にはヴァイアンを修正し、セイラスを否定するという立場をとらざるを得なかった。

I

「危険な関係」という作品に奇妙な情熱の存在を認めその情熱の性格について最も鋭く指摘したのはボードレールであった。ボードレールは「ラクロ研究」のためのノートの冒頭に「この書物が、もし灼く力をもつていたら、それは氷のように灼くほかない」と記し、さらに「歴史の書」と書きたしたのである。不幸にしてボードレールはこの研究を完成することができなかった。短いノートだけが残され、その余白を満すべき言葉の選択は後世にゆだねられたのである。私はいまこの余白を満す作業に加わりたいと思う。

〔註〕

ラクロを最もよく理解したのはスタンダールとボードレールであったというのが私の到達した結論であり私の基本的な考え方である。この小説をつらぬく主要なテーマは、ラクロという存在をスタンダールの光に照らして検討するときに、ボードレールの観点がどのような意味をもちうるかということである。ただここでは頁数の関係からスタンダールとラクロの関係についてくわしく論じることとは避けた。

ボードレールは「危険な関係」を「歴史の書」と規定しただけでなく「フランス大革命を解釈し説明する」書物であると考えた。

「氷のように灼く」というほとんど文体的な側面と「大革命」というきわめて政治的な側面とを一気に把握して直観的に結びつけるところにボードレールの鋭さがある。この観点こそラクロ解釈の最もすぐれた観点であろう。しかしこの地点に身をおくことは政治的あるいは党派の意味をもつことになる。ロジェ・ヴァイアンとジャン・リュック・セイラスの対立がそれを示している。

セイラスはこの作品の「政治的な意味」と「革命的な性格」を極力否定しようとする。二つの論拠があつて、一つはボードレール・ロジェ・ヴァイアン説の根拠が弱いということ。もう一つは政治的、あるいは歴史的側面だけではこの小説が現代の読者に対してもっている魅力が説明できないこと。セイラスはそれに代るものとして「エロチスム」の美学と「悪の精神」をもつてくるのである。

〔註〕

セイラスの主張はその標題が示すように「危険な関係」を「手紙小説の傑作」として優れてフランス的な心理小説の伝統の中に位置づけ、特にその作品の「知性の神話」に注目することにあら。ここではそうした議論の展開を支えている基本的な態度が反・ボードレール——ロジェ・ヴァイアンとして表明されていることを指摘しているのである。

ボードレールは「危険な関係」とフランス革命との結びつきを指摘する一方、人物性格の項において法院長夫人に注目して、「法院長夫人（ブルジョワ階級に属する唯一の人物。重要な観察。）単純で崇高で優しいタイプ。感嘆すべき創造物。重要な女性。感動的イヴ」と記している。しかしボードレールのノートからは、彼がこの

小説の「歴史の書」としての性格と、ツールヴェル法院長夫人が作品において果す役割をどのように結びつけたか明らかでない。ヴァイアンはそれを、ツールヴェル夫人は法服貴族すなわちブルジョワジーの側に属し、唯一の肯定的人物であつて、「危険な関係」は上昇ブルジョワジー（ラクロの属する階級）の立場から革命直前の宮廷貴族を攻撃する書物である——と展開したのである。セイラスはその弱点をついた。

ツールヴェル夫人のブルジョワの性格を指摘する人は他にもあつて（例えばマルチン・ターネルのミドルクラス説）、必らずしもセイラスのように読者が階級のちがひについて特別の注意をはらわなといふと云い切ることもできないが、しかしブルジョワ・対・上流貴族という関係を強調することが作者の意図であるとしても、この意図は成功しているとはいえないだろう。この作品に革命直前の力強いブルジョワジーの積極的な側面を認めるのには、やはりよほど強烈なイマジネーションの働きの必要とするからである。それにツールヴェル夫人を理想像と考えることは果して正しいのであろうか？

ヴァイアンがツールヴェル夫人に理想像を見出すのは、なにによりそれが「女性論」に描かれた「自然の女性」*Femme naturelle*によく似ているという理由からである。例えばヴァルモンは次のように書く。

「……著付けが下手だとのお咎めですが、それもその筈、すべて飾りは夫人を損い、夫人を隠すものは夫人をけがします。夫人が本当に美しいのは内衣にくつろいだ時です。（……）夫人の顔は無表情だそうです。しかし夫人の心に囁くものの何もないとき、その顔が一

体何を表しましょう。もちろん夫人は世の蓮葉な女たちのように、時に惑わせ常にあざむくあの偽の眼をもっています。言葉の切れ目をつくり笑いでつなぐことも出来ず、たぐいなく美しい歯をもちながら面白くなければ笑いもしません。」（第六信）

ラクロの「自然の女性」の描写には次のような部分がある。

「……自然の女性の美は我々が見知っているような女性の美とは同じではない。（……）とりわけ彼女は世界のいかなる地方の女性もきわめて巧みに利用することを知っているあの飾りの助けをかりることを全くしない（……）彼女の顔に表われた性格は通常は静かな落着きである。しかも何事かがあればすぐ面にあらわれる。（……）彼女は作り笑いができない。」（「女性論」第六章）

ここに引用された限りの特徴に關していえば、ツールヴェル夫人はヴァイアンの云うように「自然の女性」に酷似している。しかし「女性論」の同じ章には次の言葉もある。

「彼女は我々にとつてその感触がきわめて感能的に快いあの白い肌をもたない（……）彼女の陽にやけた皮膚はむしろ褐色でより活々としている。実際、繊細さにおいては劣るだろう。（……）体は大きく力強い。彼女の抱擁は（……）現代のきやしやな伊達男を窒息させてしまうだろう。」

このような女はツールヴェル夫人とは全く異つたむしろ正反對のイメージである。ラクロは「危険な関係」出版の一年後に書いた「女性論」において、ルソーの「自然人」のイメージをかりて「自然の女性」という理想像をつくりあげた。ラクロは「自然の女性」が理想像であることはくりかえし主張しているが、ツールヴェル夫

人が「自然の女性」であるとは云っていない。ラクロが「自然の女性」の長所としてあげるのはまず自由と力と健康であり、次に美と愛である。ツールヴェル夫人は最初の三つの条件をみたさない。美については半ばしかみたさない。愛……自然の女性の愛は主として母性愛であつてイマジネーションの助けをかりてめんめんと続く恋愛は自然には存在しないと考へている。恋愛感情に対してはむしろ否定的なのである。

ラクロの「自然の女性」のイメージは、ツールヴェル夫人をも含めた社交界の女性、すなわち「社会の女性」*Femme sociale*の全く対極にある存在として提出されている。そこでは父親を中心とした「家族」すら否定されている。いわば母系社会のイメージである。したがつてツールヴェル夫人は「自然の女性」であるとする説は、「危険な関係」と「女性論」をともに歪めて理解することになる。ボードレールが「自然な女性 *Femme naturelle*」と記したのはごく普通の意味で、すなわち先に引用した手紙に示された特徴をとらえたと解釈すべきである。「女性論」は二十世紀に入つてからはじめて出版されたのでボードレールはおそらくその内容は知りえなかつたであらう。

ロジェ・ヴァイヤンの立論はたしかにセイラスに指摘される弱点をもつていた。その限りではセイラスは正しくヴァイアンは修正をせまられる。しかしセイラスの第一の論拠はボードレールの観点を少しも否定するものではない。したがつて問題は第二の論拠、「エロチスム」と「悪の精神」がはたして「歴史の書」としての政治的な意味を打消すことができるか否かということにしばらくはらるであらう。

らう。

II

「危険な関係」は一七八二年三月二十三日に出版された。ルソーの死から四年後、スタンダールの誕生に先立つこと一年、大革命は七年後である。初版二千部はたちまち売り切れ、一カ月後には同じく二千部の再版が出るという、十八世紀ではまれにみる売れゆきであつた。ルソーの「新エロイズ」、ヴォルテールの「イギリス通信」いらいの成功であつたとチェリーは書いている。センセイショナルな事件であつた。ラクロを冒瀆として非難する声も激しかったが、賞讃の声も高かつたのである。スキャンダルの成功と云われているが、冷靜的確な批評がなかつたわけではない。当時の批評一般に関して次の三点が指摘できる。

一、文体は一般に高く評価された。

二、内容に関しては單なる好色小説とみる批評もあつたが、優れた写實的な小説としてそのアクチュアリテに注目する意見が強かつた。

三、非難は道德の問題に集中したが、きわめて道德的な作品と考へる人もいた。

第一の点についてはいまさら言葉を必要としないであらう。いわゆるデカルトの文体で書かれた好色小説として、明晰で論理的な文体についての評価はすでに定まつている。第二の点にかんしては現代の一般的な評価とはかなり異つていた。風俗を描いた写實的な小説として評価した文章には次のようなものがある。

「……人が上流社会 (bonne compagnie) と呼びまたそう呼ばざるをえないようなところの原則 (principes) と風俗 (mœurs) の混乱を、これほど自然に大胆にかつ才智をもつて描いた作品はない……」(グリム 一七八二年四月)

「この種の作品のなかでおそらく最も危険であるが、同時に最も真実な唯一の例外的な作品、それはラクロのあのあまりにも大胆な小説である。彼はほんとうにある特殊な社会しか描かない。しかしその諸特徴は忠実にたどられている……」(ダロソヴィル「回想録」)

「……そこには下品さはほとんどない。しばしば真実がある。しかしこの社会をそれ以上に知らない人々がある特定の階級の一般的な風俗の輝かしい描写であると思ひこむほどには真実でなく、むしろ誇張と戯画化が多い。このような見方から云えば、それは宮廷を呑みこんだ大海に落ちる革命の波の一つである。あの霹靂の無数の稲妻の一つである。……」(チリイ「回想録」)

もつともラアルプのように、著者は当代の風俗を描くといっているが、たんにうぬぼれ男と浮気女の物語を書いたにすぎないと主張する人もあつた。またリコボニイ夫人のように、それが現実であるか否かを問う以前に、このような世界を描くことに反撥を感じた人も少くなかつたであらう。しかし、ともかく多数の人々が「危険な関係」に現実を読みとつたこと、それも崩壊寸前の宮廷貴族社会の現実を読みとりそこに注目していたのは否定できない事実である。またかつてマリー・アントワネットの小姓であり、ヴァルモンのリベルタンの典型とみなされているチリイが、後に大革命の予兆をこの作品に見出したことの意味も軽くない。この書物の危険性は充分

に感じとられていたのである。ただその危険性は充分に分析し理解されないままに、この書物の反道徳性に帰せられる結果となつた。

第三の道徳の問題に関しては、例えばダンジュヴィルのようにこの小説の有用性を認めて「何故なら悪徳は長いあいだ物語において勝利をしめているにしても、結局は厳しく罰せられて終るからである」(「回想録」)と主張することもできた。しかしこれに対しては「最後の数頁が四巻にわたつて流された害毒を打消すほどに道徳的であるなどといえようか」(グリム)という反論がよせられるし、ラアルプのように「……ここでは悪徳は悪徳の故に罰せられてはいない」(「文学書簡」)と指摘することもできる。賛否いずれにしろ論としては通るのである。ラクロ自身はどのように考えたか？ 当時流行していた感傷的な小説の作家としてかなりの名声があり、ラクロとは姻戚関係にあつたリコボニイ夫人は「危険な関係」が出版されると直にラクロをたしなめるような調子の手紙をかき送つた。リコボニイ夫人の非難したのは次の二点であるが、いずれも作家としての道徳に関するものである。

一、フランスの風俗と趣味に関して外国人にきわめてけしからぬ観念を与えるように書いた。

二、悪徳をマルチエウ夫人に与えたような様々な魅力で飾つた。これに対するラクロの回答の要旨は、

一、ここに描かれているのはあくまで真実である。現実の忠実な描写である。悪徳は美德と対置して描かれているから外国人の誤解を招くことはないと思う。

二、悪徳を魅力で飾つたのではなく、醜く残酷な行為に対する憤

りから、それを暴露し非難攻撃し、同じ不幸が二度と起らないように警告するために書いた。

ブレイアード版の全集には八通の往復書簡が収められているが、この手紙で見るとラクロは結末の部分のモラリテをそれほど重視していない。ラクロは単に文学的慣習に従っているのだと云い切ることはできないが、少くとも悪者は減び悪者は罰をうけるといった式の道徳で自己弁護をしようとはしていない。ラクロの主張の力点は現実をリアルに描くことによつてそこからモラリテの形をとらないモラリテを引出すところにある。

「これまでなんとなく見逃されてきた悪徳に対する公衆の有益な憤激を自覚させる……」これだけ引用すれば平凡なおきまり文句である。しかしラクロはさらに、この瞬間において一般のごうたたる非難的となつているメルトイユ夫人とヴァルモン子爵の行爲が、実は十八世紀末の現実社会に数多くの対応物をもっていることを指摘したうえで次のように続けるのである。

「私の描いた風俗はしかしながら（リコボニイ夫人の云うように）汚辱を糧にして生きるまでの悲惨におちいつた不幸な女達の風俗ではありません。これは地位と財産がさらにこの恥すべき悪徳に加えることを許すところのものを計算することのできる、そして才智と優雅さの濫用によつてその悪徳の危険をいっそう増加させるあのより一層卑しい女性たちの風俗です。その描写は陰気なものです。それは認めます。しかしこれは真実なのです。」（第七信）

まわりくどい文章ではあるがラクロの云おうとしていることは明らかであろう。それを現実暴露というとなれば、ラクロは現実暴露

のうみだすモラリテを意図したのである。私たちは二十世紀にいて漠とした反道徳性としてしか感じ取ることができないかもしれないが、「危険な関係」のスキヤンダルは一つにはその現実暴露の性格にもとづいていたのである。たしかに同時代の人々は上流社会と呼ばれる特殊なクラスに向けられた鋒先を感じとっていたのである。それはチリイの云う革命を告げる稲妻の閃光であつた。ダロンヴェルの云うように最も危険な最も大胆な作品であつたかもしれない。革命前の十八世紀末において狙う部分があるとすれば、それは宮廷貴族の社会であつたはずだ。この態度はもはや政治的でないとはいえないのである。

III

「危険な関係」が現実暴露の意図をもつて書かれ、また当時の人々にそのように受けとられたという事実を否定することはできない。ジロドックの言葉をかりれば、それは「十八世紀にはきわめてまれな告発 denunciation の文学」であつた。しかしこのことは「危険な関係」が単なる現実暴露によつて終ることを意味しない。

ラクロとリコボニイ夫人の論争はものわかれに終つてしまつたが、モラルの問題から発して相対立する二つの文学の立場を照しだすことになつた。リコボニイ夫人が「読者が真似たくなるような感情を描くべきだ」と主張したのに対して、ラクロは「読者が自分に禁すべき感情を描くこと」に固執しその有用性を主張したのである。この往復書簡はこれまでは単なるわからずやの女流作家に対するラクロのかなり自己韜晦的な自己弁護の文章とみなされてその重

要性を認められていない。しかしここに実は十八世紀文学から十九世紀のリアリズム小説に至る道があざやかに照らしたされているのである。ラクロが現実の醜惡な側面に執着したのは「新エロイズ」や「クラリス・ハーロー」に代表され、リコボニイ夫人をも含めて数多くの亜流をうみだした感情小説に対する痛烈な批判に根ざしていた。

「もし読者諸君が、この書物（『危険な関係』）の悲しいイマジにお疲れになって、もっと優しい感情にたよりたくなつたのなら、美化された自然を求めるのなら、才智と優雅が優しさと美德につけ加える魅力についてすべて知りたいとお望みなら、ド・ラクロ氏は読者が『エルネスチヌ』『ファニイ』『カテスビー』等々を読むようにお勧め致します。（……）読者がそのモデルの存在をうたがったら、自信をもって、モデルはすべて画家の心の中にありますとおっしゃればよいでしょう」（第二信）

「エルネスチヌ」はかつてラクロが脚色を試みて失敗したリコボニイ夫人の感情小説、「ファニイ」「カテスビー」はいずれも十八紀中葉に出たイギリスの同じ系統の書簡体小説。空想にしかすぎない「真似たくなるような人物性格」に対する不信の表明なのである。これに対してより厳しい仕事を強いられた男性であるラクロは「自然を正確忠実に描き出した時に一番よい仕事をしたことになる」のだ。自然という言葉はこの場合は社会とおきかえてよい。

ではラクロの描く世界はどのようなものか？ はじめラクロはメルトイユ夫人の实在性を強調して次のように云う。

「ド・ラクロ氏といえば、彼はより不幸な経験をつんだ結果、彼

がM夫人という人物の内に集めた諸特徴のうちどれ一つを消しても良心に反した啞になるか、少くとも彼が見たものの一部について口を閉すことになる」（第二信）

この問題は次の手紙でさらに展開される。

「M夫人が現実存在するはずはないと主張する人がある。本当に居るのですか？」と問う人がある。私は知らない。私は中傷の文章を書くつもりはなかった。しかしモリエールがタルチュフを書いた時（……）おそらくそんな「芝居に描かれたとおりの」男は存在しなかった。しかし二十人あるいは百人の偽善者が別々に同じように醜い行いをしていた。モリエールはそれらの偽善者の中から一人を選び、その人物にそうした醜い行いを集中し、それを公衆の怒にゆだねた。（……）私もモリエールのように一人の人物のうちに同じ性格の様々な特徴を集める……」（第四信）

「危険な関係」のアクチュアリテを卑俗なかたちで証明したものにモデル問題がある。いわゆる鑑が探し求められ、大臣から無名の詩人に至るまで実に多くのモデルがあらわれたのである。ラクロは自分の描いた世界は心の中にのみ存在するような空想ではなく、あくまでも現実社会に存在する現実であると主張する一方、モデルは単数ではなく描かれたのはいわば典型だという。ラクロはこの考えを徹底させて「M夫人は一フランス女性であると同時に他のどのような国の女性であつてもよい（……）こうした悪徳を身につけた女性をうみだす国であれば（……）メルトイユ夫人はそこに存在する」という。すなわち問題になるのは偶然のうみだす一個人でもなければ永遠の人間像でもなく、一定の現実の社会関係がうみだした

必然的な存在であると主張しているのだ。これはきわめて近代的な虚構論であり典型論であらう。

十八世紀美学を代表するディドロは虚構を認めなかったという。

「安定的秩序から見ればフィクションは『作りごと』となり、独自の仮定的構成としてのフィクションという近代的把握は出てこないのである」(桑原武夫編『フランス百科全書の研究』二九三頁)

「危険な関係」はいわば安定的秩序の崩壊の一面を捉えた小説であるが、ラクロは文学論においても十八世紀の終りと十九世紀のはじまりを示している。私達はこれまでラクロの小説の物語の構成のたしかさ、人物と手紙の配置とそれに対応する葛藤と心理の展開の見事さに目を奪われがちであったが、このたくましい構築力を支えている積極的なフィクションの観念を忘れてはならないのである。

虚構よりは事実、すなわち歴史を重視する十八世紀にあって、ラクロは小説の優越性を考えたまれな存在であった。もちろんラクロはディドロのような偉大な美学者ではない。豊かな思想家であるとはいえない。しかし小説の機能に関する限り、ラクロの観点は進んでいたのである。ラクロは詩や芝居から、歴史やメモワールからどうしても脱落せざるをえない部分を小説がしっかりとらえていることを見抜いたのであった。

ラクロによれば、歴史は国家のことを語るが市民のことは語らない。公的なことは教えるが個人のことは口をとぎす。表面にあらわれた人間を描くがありのままの人間は描かない。回想録は個人、それも例外的な個人しか描かない。歴史は人間の感情と情熱のもたらしした様々な結果を提供するがその原因はかくす。歴史の照明は君

主の方にばかりむけられていて民衆には向けられない。演劇はおそらく社会のより真実な、現実により近いタブロオを提供するが、芝居に描かれる限度はしれている。人物性格や感情と情熱をあらゆる細部にわたって描くことはできない。また小説においてはその描かれる状況に真実の力のすべてを与えることができるが、芝居ではあまりに強烈な真実の表現はつしまなければならぬ。……このように考えてきてラクロは小説の機能を人間認識という言葉で要約している。

「人間の精神と心情についてこれほど多くの認識を必要とするものは少ない(……)。この認識のみがおそらくロマンの長所となりうるのだ。(……)人間の風俗、性格、感情、情熱などを知ること」を小説以外のどこで学ぶことができよう。」(「小説セシリアについて」一七八四年)

旧制度が崩壊の寸前にあった十八世紀末、人間とは何かが改めて問われる必要にせまられた時代に、ラクロは最も広く熱心に読まれながらほとんど尊敬されることのなかった小説というジャンルに人間認識の方法と道具を見出したのである。この事実とは二十年後に若いスタンダーが人間認識の科学としての「イデオロジー」をたよりに懸命な詩作を続けながら、やがて現代において真実はもはや小説においてしか追求できないと考えて小説に転向していった事実と重ね合わせるといっそう深い意味をもつであらう。

「危険な関係」は現実暴露の作品であるが、ラクロの現実とは現実社会の一断片といった種類ものではなく、フィクションにより典型として描かれるいわばより高度の現実であった。ラクロにおける

暴露とは現実社会の真実をきわめたい要求であり、社会的産物としての人間の認識であった。「永遠の人間像」が崩壊し、あばくことによって真実が問われる時代が始つたのである。

IV

ではあばかれた現実、暴露された真実とは何か。ラクロの人間認識とは？ 私達は作品の外的な条件の検討から作品そのものの分析に移らねばならない。

ラクロは「新エロイズ」の序文から取つた「現代の世相を見て余はこの書簡集を公にした」という一節をエビグラフにしている。

「危険な関係」のエビグラフとしてこれほど適切な言葉はないだろう。第一にこの書物がまさにその時代の世相の反映である故に。第二にそれがルソーの言葉である故に。「危険な関係」は「新エロイズ」のパロディであり、そこにこの書物の存在理由があるといつてもよいのだ。「危険な関係」は明確にそして細部にわたつても「新エロイズ」の意識し、その否定的表現であり、ほとんどネガとポジの關係にたつ。(この点に関する分析と展開は、松本と佐々木によって行われる)「現代の世相」は「新エロイズ」的世界を逆転したところに真実の姿をあらわすとラクロは考えるのである。

「新エロイズ」が悪人の一人も出ないことを誇る小説であるならば、「危険な関係」は悪意と中傷と墮落と裏切の世界である。「新エロイズ」的世界は、ヴァルモンとツールヴェル夫人の恋と、ツールヴェル夫人とロズモンド夫人の人間的なつながりのあい

だに一瞬かいまみることが出来る。しかし一瞬にすぎない。「危険な関係」は誘惑の成功と失敗の物語であつて、貫徹く原則は善悪、正邪ではない。強者と弱者の論理であり、サンファンがラミエルに教えた「この世には利口と馬鹿がいる」という思想である。利口な人間は異をかけ。愚かな人間は異におちる。そして共に身を滅ぼすのである。以上の観点から登場人物は二組に大分される。

一、メルティユ夫人。ヴァルモン子爵。

二、ヴォランジュ嬢。ダンスニイ騎士。ツールヴェル法院長夫人。その他の副人物。

ロズモンド夫人はどの組にも属さない。これはすでに年老いて世間を知つた人間である。一人安定して動かないいわば座標軸のような存在である。第一の組は利口な人間、あざむく側である。第二の組は愚かなあざむかれる側である。

メルティユ夫人とツールヴェル夫人は対極に位置し、その間に他の人物たちが並ぶ。メルティユ夫人はいわゆる悪徳の権化であり最も行動的で最も賢明である。ツールヴェル夫人はいわゆる善徳の権化であり、最も受動的で愚かである。立場をかえていえば最も無知で愚かである故に最も賢明である。この両者のコントラストが物語の明暗であり、メルティユ夫人のツールヴェル夫人に対する嫉妬が全篇の緊張關係の基礎をなしている。この嫉妬はヴァルモンをささむ恋愛感情にもとづくというよりは、もっと深い存在自体に対するいわば悪徳の善徳に対する嫉妬である。お互に否定的な存在であつて、どちらか一方を理想像と考えるべきではない。実生活においてラクロがツールヴェル夫人型の女を選び家庭的な幸福を望んだという

ことは充分に考えられるが、作品はそのようには書かれていない。作者の関心と注意は主としてメルトイユ夫人に向けられている。

物語はメルトイユ夫人とヴァルモンの関係の展開にそって発展するが、最も奥深いところで原動力として働いているのはメルトイユ夫人の復讐の意志であり、物語の発端となるのもメルトイユ夫人の復讐の意志である。(物語の詳細な分析は天羽によっておこなわれる)しかし裏切られた男に対する復讐というのでは人物の行動の全体の説明としては弱いであろう。この主人公たちがこのような情事に懸命になって生命までもかけるのは何故か? 動機の薄弱さが気になるのである。心理の幾何学模様がおどろべき精密さでたどられているだけに基本になるべき動機の説明の脱落はいっそう目立っている。いわゆるリアリズム小説の概念からすれば、明らかな欠陥であるからこれは「危険な関係」が尻につけている十八世紀の殻であると考えることができる。しかしこれを一つの長所として、そこに描かれた行動の無意味さこそまさに十八世紀末の貴族社会の現実であると考えられることも可能である。頽廢の世界における行動はその動機の薄弱さと非合理性の外観を示すことがある。動機のさほど明確でない残酷な行為の奥底に何物かに対する復讐の感情がかくされていることがある。メルトイユ夫人の復讐はいわゆる美德に対する嫉妬の変形である。あるいは嫉妬は復讐の変形であるとも云えよう。同じ感情の両面である。

リベルタンの系譜とその社会学的考察を今ここに展開する余裕はない。チェリーの「歴史的眞実」と題する章から「危険な関係」の世界をかなりよく説明している部分をかりよう。

「……このような風俗の乱れ、最も強かるべき夫婦のきずなのこのような弛緩は貴族階級という少数者に限られた事実であった。国民、民衆、ブルジョアジーの大多数はそのような墮落をこうむつてはいなかった。

何故か? ティヌがスタンダールにならって言うように、百五十年來フランス貴族階級は奴隸の生活をしていたのである。黄金で飾られた奴隸でもやはり奴隸だ。自分が有用な人物であると見られることをおそれた結果、今では人の氣に入ることだけに専念してそれで満足していた。王がすべての膳立をすることになっていたので術策が勇氣に代り、才能よりも生れが優越した(……)

宮廷の生活は乱れていたから容易に(貴族を)墮落させたのである。野心をもやすことをおさえつけられて、無為に日をすごすあの上流貴族たちはすべて虚栄心の傷口をいやすすべもなかった。サロンにおける勝利が唯一のものであった。あらゆるもののなかで愛の成功が最も快いものであった。

このようにしてヴァルモンは形成されたにちがいない……」(P 136)

由緒ある家名と莫大な資産と人に好かれる数々の性質を備えたヴァルモン(第三十二信)の説明としてはこれで充分であろう。またボードレールがツールベル夫人はブルジョワジーに属すると指摘した理由もこの文章から推察できよう。メルトイユ夫人についても幾分か。しかしこの惡魔的な女の解釈はもう少しちがったところから出てくるように思われる。

メルトイユ侯爵夫人からヴァルモン子爵にあてた第八十一信の長文の手紙は全百七十五通の手紙の中でも特殊な調子と特殊な意味をもっている。物語の筋の運びに直接関係のないほとんど唯一の手紙で、メルトイユ夫人の行動方針と生き方が信仰告白めいた調子で述べられている。作品のいわゆる芸術的完成度とか全体の調和の観点からいえば省いた方がよいような文章である。だがそのことは逆にラクロがこの手紙とメルトイユ夫人という人物にかけた意味の重さを説明することにもなる。ここには「危険な関係」をかけたラクロの思想が生のかたちで出ている。そのことはこの手紙を「女性論」とくらべてみればはっきりするだろう。（「女性論」のくわしい分析については松本論文参照）

「女性論」においてラクロは「社会の女性」に対立する「自然の女性」という理想像を考え、「自然の女性」が社会の文明に毒されて男性の奴隷にすぎない「社会の女性」に転落していく過程を追求している。ルソーの影響の顕著な論文である。ルソーは「人間は自由なものとして生れた。しかもいたるところで鎖につながれている。」と書く。ラクロは「自然は自由な存在しか造らない。社会は暴君と奴隷しか作らない」（「女性論」第十章）と書き改める。すなわち自然を支配するのは自由であるが、社会を支配するのは弱者と強者の法則であり、弱者である女性は強者である男性の奴隷であり、この隷属関係が「社会の女性」の諸特徴をすべて説明するといふのだ。鎖につながれている人間社会の中のもう一つの隷属関係

を考えようとするのである。「自然の女性」は「自然人」の部分にすぎないが、「自然の女性」のイメージをもとにして社会関係を考えるのは女性論に弱点のあるルソーの欠陥（男性中心・家庭中心主義）を鋭くつけたことになる。「危険な関係」が「新エロイズ」のパロディでありうるためにはこのような思考を必要としたのだ。メルトイユ夫人は八十一信で書いている。「女性の為に復讐し男性を征服するために生れた私が……」

ラクロは「女性論」を次のように書く。

「女性と男性の間に存在する絶えざる戦いの状態にあつて、女性 は自からつくりだした愛撫のたすけをかりて、常に闘いに勝利し……」（第十章）

物語の発端は一見メルトイユ夫人のジェルクルに対する復讐心にあるかに書かれているが、真のはじまりはメルトイユ夫人の男性一般に対する復讐の意志にある。もちろんここでいう戦いは、アムール・クルトワ的な恋愛ではない。ラクロの見地から云えば男性は女性に対しては暴君であり、社会を代表し「征服者の権利」を「社会契約」のかたちで執行する権威である。

女性のために復讐を誓ったメルトイユ夫人が、ヴァルモンにヴォランジュ嬢とツーヴェル夫人に対する誘惑と裏切を求めるのは一見矛盾であるが、ラクロ・メルトイユ夫人の見地から云えば、男性の好みにあつた鋳型にはめられてそこで充足している女性は男性の影にすぎない。男性の好みにあつた鋳型とは云うまでもなく男性が女性に求める美徳の数々である（ボーヴォワール「第二の性」参照）ツーヴェル夫人はそのような美徳の典型である。ツーヴェ

ル夫人が理想像であるのはこの意味においてである。

ツールヴェル夫人は「社会の男性」の夢である。ラクロの見地から云えば男性もまた文明社会の犠牲者であり、いわば疎外された人間としての人間回復の欲求が、このような女性の理想像をうみだすのである。したがってツールヴェル夫人はヴァルモンにとつては救いなのだ。一見して共犯者であるメルトイユ・ヴァルモンが実は敵対関係にあり、一見して加害者と被害者の関係にあるヴァルモン・ツールヴェルが実は共犯者であるのは以上の理由による。単なる嫉妬ではないのである。

メルトイユ夫人は書く

「……しかしこの私には、そういう軽率な女とどういう共通点がありますでしょうか。私は自から定めた掟を破り、自分の主義に背いたことがありますか。(……)それは外の女達の主義のように偶然に与えられ、吟味もせず受け入れ、ずるずるべつたりに守ってきたものではなく深い思案の結果なのです。私はその主義を創造したのです。そして私という人間は私自身が造りあげたものです。」

弱者が目覚め、逆に自己の弱点を武器として強者に挑むとき「主義」すなわちブランシップに身をかためる必要があったのだ。ここに新しい人物典型、マルロオの云う *personnage significatif* のうまれる理由がある。ジュリアン・ソレルにおけるタンチュフのテーマが始まるのである。「明晰な頭腦をもち、あらかじめ考えてから行動する人物」「イデオロギーによつてその行動が決定される人物」(マルロオ「ラクロ論」四二〇頁)が誕生するのである。

生娘として社交界に出たメルトイユ夫人が「事件や世評を自在に

駆使し、怖るべき男性を気紛れや空想の玩具とし、或る男からは我に禍いする意志を奪ひ或る男性からは我に禍いする力を奪う」おそるべき女性として自己を形成していく過程は、上流社会に身を置いたジュリアン・ソレルが成り上つていく過程でもある。

彼女は社交界における沈黙と所在のなさ「観察」と「思索」に利用することからはじめる。「隠す」ことを学ぶ。次にそれを徹底させて「振りをする」ことを知る。こうした「自己鍛錬」によつて彼女の「観察力」も一層ふかめられるのである。「恋とその快楽の迷を解こうと努めて」懺悔僧に偽の告白をする。結婚も観察の場にすぎない。「苦痛と快楽、私は一切を正確に観察し、これら様々の感覚を蒐集し考察すべき事実と見た」と初夜について語るのである。(森番に自から身をまかすラミエルも同じことをしているのだ)暴君としての夫に対する偽善の研究が続く。「多感である故にこそ夫の眼には却つて冷静に見せようと決意」するのである。観察力は読書と内省によつていつそう確実なものとなる。

「観察」と「演技」に要約されるメルトイユ夫人の方法は、禁欲的な快楽主義者の方法である。「多くの人が自惚の犠牲にするものを、私は自分の幸福のために用いようと決心した」と告白している。この多分に感覚論的な幸福追求は妥協を許さない。思考と行動「観察」と「演技」の美しい緊張関係が貫ぬかれているので自己偽瞞からは全くまぬがれている。自己に対するこのように徹底した誠実さと、「征服かさもなければ滅亡です」という一瞬の弛緩も許さぬヒロイズムという二つの美点を備えた人物は、小説史上スタンダードを待ってはじめて再現する。論証は省くがメルトイユ夫人の方

法は、ジュリアン・ソレルとラミエルの方法であり、スタンダード自身を試みて半ばしか果さなかった方法であった。ヴァルモンが自由思想家としても放蕩者としてもブシコログとしてもメルトイユ夫人に劣るのは、彼女が「征服か滅亡か」と書くとき「征服、それが我々の運命です」(第四信)としか書けないからである。「ねえ子爵、なくても済む長所というものは、めつたに獲られるものではありません。」(八十一信)とメルトイユ夫人は教えている。

メルトイユ夫人の方法の起源を「女性論」は次のように説明する。

「社会の初期にあつては一般に圧迫と輕蔑が女性の分け前であつた。(……)このような状態は長い世紀にわたる経験が力に対して術策をもつてすることを教えるに至るまで衰えることなく続くであろう。彼女たちは女性は男性より弱いだから、女性の唯一の手段は魅惑することであると悟つたのである。(……)女性は男性よりも不幸であつたから男性よりも真剣に思考し反省したにちがいない」(九章)

このようにして女性が到達したのが想像力の問題であつた。現実における奴隷は想像力による女王となる。現実における快樂よりは、人が快樂について抱く空想の方がより魅力的でありうるというのがラクロの考である。女性の「演技」の本質はここから説明される。

「想像力(imagination)は自然(nature)よりもはるかに遠く及ぶということを知つたのだ。(……)彼女たちは好奇心を目覚めさせるためには第一に女性の魅力を覆いかくすことを学んだ。同意

したいと思うときにすら拒絶するという難しい術をあやつるようになった。このとき女性は男性の想像力に火をつけることを知り、男性の欲望を自由にそそりあやつるようになった。かくして美と愛がうまれる……」(九章)

〔註〕 ラクロは「美とは享樂に最もふさわしい外觀——最も快い享樂を予想させるような状態にすぎない」と定義する。

「……美と愛は嫉妬をうみ、この三つの幻想(illusions)が男女の相互の状態をすっかり変えてしまった。(……)この三つの幻想は今日ではついに我々の情熱の唯一の源泉になつてしまった。」

(第九章)

かくて「危険な關係」の世界に至るのである。現実の生産關係から切離され、生活が現実的な基盤を失い、想像力がいたずらに美と愛と嫉妬を肥大させてゆき、それらがついに幻想としてしか存在しえなくなつた社会、それこそ「危険な關係」に描かれた貴族社会であつた。

メルトイユ夫人の觀察力は「女性論」でラクロが指摘するような社会の特徴を冷く的確にとらえ、その上に彼女の演技は成立しているのである。「女性論」におけるラクロの視点はメルトイユ夫人の視点と一致している。プレヴァンをおとしめ、ダンスニーを誘惑し、ヴァルモンをあやつり善良な紳士淑女の目をあざむいたメルトイユ夫人は弱さ故の女性の武器を最も有効に用いたのだ。その点でメルトイユ夫人は最も墮落した女性、惡の典型であり、リコボニイ

夫人の云うように「怪物」なのである。しかも彼女は自己を欺くことなくその墮落を「演技」することによって、社会の墮落を二重にあばくのである。ジュリアンがタルチュフを演じて社会の虚偽をあらわしてみせたように。

八十一の手紙はメルトイニ夫人の信条を明かすことによって、作品の意図を明かしているのだが、それは同時にラクロの作家としての態度をも表明している。重要なことは「危険な関係」における「人間認識」はメルトイニ夫人の観点からなされており、それは「女性論」の著者と同じ観点であるということである。ということはラクロが女性というしいたげられた人間の視点と、小説の視点とラクロ自身の視点とを重ねたということである。それは女性は特に小説というジャンルには適しているというラクロの主張（「センチアの小説について」五〇一頁）にもつながってくる。自己を主張するためには「観察」と「演技」が要求される人間の視点である。

チリイの証言によれば、ラクロはたいした昇進も名声も望めない技術（砲兵）将校という職業に満足できず、世の中をあっといわせることがしたくて「危険な関係」を書いたということになっている。真偽のほどは別として、「危険な関係」の作者が現状に対する強い不満をもっていたことは彼が書き残した他の文章からも十分に推察されるのである。現状に対する不満の一つには彼の逆説的あるいは否定的表現となつてあらわれている。例えば「危険な関係」は「新エロイズ」のパロディとして、当時流行していた感傷的な手紙小説に対する反定立である。「女性論」は「女性の教育を完成させる最良の方法は何か」というアカデミーの問に対して、一つの革

命が行われない限り現状においては女性教育はありえないと答えた論文である。「ヴォーバン讃」は実は讀ではなく、この国民的英雄の技術者としての才能を否定し、彼がフランス国民のうえに残っていた莫大な経済的重荷の故にこの国民的英雄を告発しているのである。こうした否定的表現が勇氣を必要としなかったとはいえない。「危険な関係」を書いた結果、彼は左遷されたのである。ヴォーバンを否定することはフランス軍人としてあるまじき行為であるから、ラクロは一時軍籍を離れるのだ。権威が否定されねばならない時代が来ていたのである。「ヴォーバン讃」の二年後に大革命がはじまる。

最後にもう一つの逆説をつけ加えなければならない。それは「危険な関係」はフェミニスト小説であるということである。これはロジェ・ヴァイヤンの説であるが、ツールヴェル夫人が理想の女性であり「自然の女性」であるとする考え方は否定されるべきであることはすでに述べた。しかし「危険な関係」が女性の視点から、女性の間回復の問題を提出していること、また「女性論」がこの作品解釈の理論的根拠を提出しているという主張の正しさは否定できない。

〔註〕

「危険な関係」と「女性論」の関係を全く否定することによって「危険な関係」の政治的・歴史的意義を否定し、リアリズム小説としての意味を認めまいとするのがセイラスの立場である。しかしこの論証（九〇～九一頁）は全く説得力をもたないと思う。というのは第一にセイラスは第八十一信を別とすればという前提に立っているから。第二に、

セイラスが社会秩序の結論として描かれていないと主張する「エロチスム」を、ラクロは「想像力」の理論によって社会的産物として解釈しようとしているという確証があるから。第三に、ラクロの精神によほど大きな変動を認めない限りこのような近い日付をもった作品の関係を否定することが本来、不自然なのである。

V

「……自然があなた方に与え、社会があなた方から奪った様々な長所についてどう思っているのか。男と対等な相手として生れながら男の奴隷となりはたのは何故か。このような惨めな状態におちいりながらもこの有様に満足し、はてはそれがあなた方の生来の状態であると考えに至ったのは何故か。最後に奴隷の生活の長い習慣によって墮落させられて、自由で尊い人間の苦難にみちた美德を捨て、卑しいが安楽である悪徳を選ぶに至ったのは何故か。……」

（「女性論」第一の草稿）

ラクロはこのように呼びかけていくのである。ラクロはこれを書きながら社交界の女性だけを思いうがべていたのではないであらう。

ラクロにこのような文字を記させる根源的な力は何か。現在この間にはつきり答えることはできないだろう。確証はまだないのだから。しかし次のことは認めてもよいのではないか。すなわち「女性論」の文章と後にラクロがジャコバン・クラブで書く文章との間に断絶はないということ。ラクロが男性と女性の関係として展開した

隷属と屈辱の関係はもっと広く支配者と被支配者の普遍的な関係におきかえることができるということ。

「……あなた方の不幸と敗北の物語をきいてあなた方が屈辱と怒に顔をあからめるなら、憤激の涙があなたの方の目からこぼれるなら、あなたの方が自己の長所をとり戻し、女性本来の豊かな能力を再び手に入れたという高貴な願望に身をやく思いをするのなら、女性ほもはや偽の約束に欺かれてはならない。」

このような言葉がいまなお私達の心にうったえたとすれば、それはそこにこめられた人間性回復の切なる願によってである。冷徹な人間認識は人間性の回復を願う熱い心によって支えられていたとは云えないだろうか。

私達は「危険な関係」を「女性論」と結びつけて考察することを提案してきたのであった。とかく孤立した作品として軽率に「現代的な意味」を与えられがちな小説を、ラクロの文学観と社会観に際らしあわせて理解しようと試みたのである。このような方法によってこれまでの「危険な関係」解釈にいくつかの提案を加えることができると思う。

第一に、「危険な関係」を神秘性から解放すること。この世界を構成しているのは徹底した合理主義である。そこに描かれた人間の心理と行動はすみからすみまでラクロの人間認識に従っている。そしてラクロの人間認識は人間の行動と心情のどのように小さな部分をとってみても、やはり社会関係の産物であるという、徹底して唯物論的な優れて反映論的な認識である。

第二に、このような合理主義は、人間の非合理的側面を強調する

人間の根源的「悪」、あるいは本能的な欲求としての「悪」を否定する。メルトイユ夫人が悪の化身であるとしても、その「悪」は悪しき社会のうみだした「社会悪」であるという認識がラクロにはあった。

「危険な関係」が「告発の文学」として「政治的・歴史の意味」をもちうるのは、この作品が合理主義による「社会悪」の認識から発しているからである。メルトイユ夫人はこのような意味での「悪」に徹し、その「悪」を最高度に利用することによって奴隷であることを拒否した一個の独立した自由な人間としての自己を主張したのであり、そこに彼女の偽善の本質がある。メルトイユ夫人の復讐と嫉妬はいわば人間回復の願望のゆがめられた形である。「危険な関係」において勝利を取めたのは悪でもなければ善でもない。ここに描かれた美德と悪徳は社会の矛盾がうみだした二つの価値であって、社会悪の相対立する二つの表現にすぎない。そこに墮落と頹廃のリアリステックな把握がある。

第三に、「危険な関係」にエロチスムが存在することは認めなければならぬ。しかしラクロの価値基準によれば、エロチスムは負の符号をもった価値である。墮落の徴である。想像力のみを肥大させた社会の衰しい産物なのである。ラクロの考えが正しいか誤っているかは別として、「悪の精神」と「エロチスム」という歴史と社会を超越した二つの価値によって「危険な関係」を評価するのは、この作品の逆（さか）に読むことである。否定と肯定をとりちがえることである。

それでは「危険な関係」とはどのような小説か？

第一にそれはボードレールの云うように「氷のように灼く」小説である。メルトイユ夫人をかりたラクロの冷徹な、しかし情熱のこもった鋭い視線が読者の心の奥底までをつらぬくような小説である。張りつめたヒロイズムが偽善をあばき虚偽を許さない。

第二にそれが「氷のように灼く」とすればはかなぬそれが「歴史の書」であるからだ。なぜなら大革命直前の腐敗墮落した社会を「好色小説」のよそおいかくれて、冷く見つめていた驚くべき観察力を備えた眼が存在したというのはまさしく歴史的な事実なのだから。そして人間回復の願望がこのような表現をとることは一七八二年という日付によって始めて納得できる性質のものであるから。さらに、このような願望とこのような観察力が大革命の前提となっただから。「危険な関係」はたしかに大革命を解釈し説明するものである。この意味ではロジェ・ヴァイヤンが云うように「危険な関係」は上昇ブルジョワジーの立場からなされた貴族社会を攻撃する文章であるとも云えるのだ。しかしこのような観察の視点と方法と、それを支える人間回復の願望はかならずしもブルジョワジーの立場をとらないということは、それをスタンダールが取り入れるときにあきらかになるだろう。

第三に、「危険な関係」はその時代の風俗を描いた写真小説である。これが歴史の書であるもう一つの理由である。ラクロのリアリズムは何よりも人間の心理の分析を武器としているが、これは人間の心理と行動を社会的産物として法則的把握するという点でスタンダールの云う意味での「イデオロギー」の心理学、あるいは人間学ときわめて近い。従ってラシーヌやラファイエット夫人の心理分

析とスタンダールの心理分析の間には大きな断絶があるが、ラクロとスタンダールの間は断絶よりは連続が目立っている。ラクロの小説観、すなわち人間の精神と心情の認識を課題として虚構によつて典型を描く方法は、「細部」を重視する態度と共に、十九世紀のレアリスト達にきわめて近いのである。

しかし「危険な関係」はバルザックやスタンダールの小説と同じ程度にリアリズムであるとはいえない。「危険な関係」に描かれた人物はその思考と心理と行動のありかたにおいてそれ以前のフランス文学における人物とはきわめて異質な印象を与える。優れた思考力と分析力を持ち主義にもとずき一貫して行動する。しかし十九世紀のリアリズム小説と比較すれば主人公は肉体をもたず現実社会とのつながりがそれほど明確に具体的には示されていない。人物と情景は時間的に孤立して、広大な世界との関係が一応たち切られている。したがって「赤と黒」がフランスの一八三〇年代の年代記であるという意味で、「危険な関係」を一七八〇年代の年代記ということではできない。これは「危険な関係」の過渡期的性格を示すものである。八十一の手紙はその過渡期的性格を示す一例である。

この過渡期的性格の一つにはラクロの思想と作品のずれとしてあらわれる。「危険な関係」はたしかに手紙小説の傑作である。それは認めるが一方ではラクロの思想は手紙小説では盛りきれない性格のものではなかったかという疑問が残るのである。

しかし現代から眺めればこの過渡期的性格はラクロの観察力と思想の弱点としてあらわれる。すなわち歴史と社会の具体的な（事実をもとにした）把握と、その全体的イメージの欠如。人間と社会の

密接な関係の認識の不足。虚構と現実の対応関係の厳密さの欠如。だが十九世紀の優れたリアリストに比べては欠如であり不足であるとしても、十八世紀においてみればいずれもラクロの長所である。なぜなら大革命がこれらを充分に可能にしたのだから。

このような評価はラクロを歴史の中にとじこめてラクロの現代性を奪うものではないのか？ 私はあえてそれを試みたのである。私はラクロの現代性を云々する論者から真の現代的な意味をほとんどききとれなかった。いま私がラクロにささげる最大の讃辞は、もし「危険な関係」が存在しなかったらスタンダールの小説はありえなかったか、少くとも非常にかわったものになっていただであらうということである。^(註) 63・9・22・63・9・30 NN

〔註〕

スタンダールは「新エロイズ」と「危険な関係」の総合を考えている。また最後の小説「ラミエル」が書かれた時、スタンダールがメルトイユ夫人を考えていたことが、残されたノートから知られている。スタンダールとラクロの関係については別の機会にくわしく述べたい。